

外国人高校生向け日本語授業の引継ぎ記録に関する考察 —書き方の特徴とその変化に着目して—

浜田 かおり 飯島 博子 大津 友美

要 旨

本研究では、ある高校の外国人高校生向けの日本語指導を担当した4名の講師の授業引継ぎ記録の分析を通して、その書き方の特徴を示し、その特徴が他講師との引継ぎ経験を経てどう変化するかを明らかにした。分析の結果、紙面1枚で報告する生徒数と教授内容の書き方に特徴が見られた。また、記述内容の分析から、「教授方法重視型」と「生徒情報重視型」という2つのパターンに分けられることがわかった。そして、それぞれの講師の記録スタイルは時間を経ても大きな変化が見られなかった。このような特徴とアンケート等で得た現場の講師の声を踏まえ、新しい授業引継ぎ記録の形式を提案した。
【キーワード】 外国人高校生 日本語指導 ティームティーチング 授業引継ぎ記録 生徒情報

A Study on Teaching Records of Japanese Classes for International Senior High School Students: Focusing on reporting styles and changes

HAMADA Kaori, IJIMA Hiroko, OTSU Tomomi

【Abstract】 The purpose of this study is to analyze the teaching records kept by instructors who taught Japanese to international senior high school students in order to identify the instructors' reporting styles and how their styles changed after they experienced an exchange of teaching records with their colleagues. The results show that (1) there are two styles of reporting: "teaching method oriented" and "student information oriented", and (2) each instructor's recording style does not change significantly over time. Based on these findings and the results of a questionnaire to the instructors, a new record-keeping format is proposed.

【Keywords】 International senior high school student, Japanese language instruction, team teaching, teaching record, student information

1. はじめに

日本語教育の現場では、複数名の講師が曜日等によって交代で1つの科目を担当するチームティーチングで授業を運営することが少なくない。そのため、講師間で授業の進捗や内容、生徒の様子等の情報共有が必要であり、そのためのツールの一つとして「授業報告」に代表される授業引継ぎは不可欠である。授業引継ぎ記録については、連絡方法の効率化を目指した研究（脇田・越智 2006、北村 2018）や内容面に着目した研究（田中 2018、吉田 2021）等があるが、そのほとんどは大学をフィールドとしたものである。

近年、日本語指導が必要な高校生が増えてきており、様々な高校において生徒への学習支援の一環として日本語指導が行われている。1人の指導者が日本語指導を担当する場合もあるが、日本語学校や大学の集中日本語コースで行われているようなチームティーチングが行われている場合もある。高校生を対象とした日本語指導の場合は、学習者が未成年であること、かつ集団への適応や人間関係等、様々な困難を抱えている場合も多い（上原 2018、矢元 2018）ことから、日本語を教えるということだけでなく、学校生活全体を支援するという特徴がある。また、様々な制約のため、日本語レベル別にクラスを分けることが難しく、異なるレベルの学習者が混在している状況が一般的である。毎回決まった生徒が決まった時間に来るというのではなく、毎回異なる生徒がクラスに来るということもある。そのため、同じレベルの生徒でも進捗が同一とは限らない。このように、同じチームティーチングという授業形態ではあっても、日本語学校や大学の日本語教育現場とは条件が異なるので、引継ぎ記録の書き方や内容にも違いがあることが予測される。

そこで、本研究は今まで授業引継ぎ記録の研究対象とされてこなかった高校に焦点を当て、ある公立高校（以下、A高校）におけるチームティーチングによる日本語授業を担当する講師間での授業引継ぎ記録の内容を分析する。

2. 先行研究

授業引継ぎについては、大学等主に成人学習者のための日本語クラスにおいて、講師間で共有されたものを対象に、これまでに様々な研究が行われている。

引継ぎ内容の特徴についての研究は、田中（2018）や吉田（2021）等が挙げられる。田中（2018）は、大学の初級文法クラスにおける授業引継ぎ記録の「授業の様子」欄と「学生の様子」欄の記述について、形態素別の抽出語リストを作成するとともに、語と語の結びつきを共起ネットワークで探るテキストマイニングにより、講師が共有しようとする中身を明らかにした。「授業の様子」では、学習のみならず体調や態度について、及び文型や会話の練習に関する記述が見られたと報告している。

また、吉田（2021）は、大学のオンラインによる初級クラスで授業記録に書かれて

いる記述項目のカテゴリー抽出とユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を利用した分析、及び講師のビリーフ調査を行い、講師が引継ぎの際に何に注目しているかを明らかにした。カテゴリーは①学生についての記述が最も多く、その他②教師（執筆者）が行った指導とその結果、③他の教師への依頼・返事、④前回書いた件のその後について、⑤オンライン授業、接続に関する課題、⑥心配事の共有、⑦教員の失敗のシェア、⑧今後の指導方法についての提案、⑨教師の内省、の全部で9種類が抽出されたと述べている。また、「学生が～してくれた」「できた」という表現が多く、褒める言葉が多い傾向にあり、学生間のやり取りも多く報告されたという。引継ぎに書くべき項目は教員により違いがあったことも併せて指摘している。

しかし、田中（2018）と吉田（2021）の研究は、大学をフィールドとしたものである。そのため、未成年を対象とした教育現場では、引継ぎ内容の異なりが見られる可能性がある。また、指導項目・指導手順は分析対象から除外されており、講師ごとの特徴もわからない。さらに、具体的な書式の提案までは言及していない。

続いて、他講師との引継ぎを通して、講師間で互いにどのような影響を受け、引継ぎ記録の書き方がどのように変化したかに注目した研究には、趙・長谷川（2011）がある。この研究では、大学の日本語会話クラスにおいて、ティーチングアシスタントの日本語教育経験の有無により授業報告の形式と内容がどのように異なるのか、そして学期を通してそれらがどのように変化するのかを観察した。形式の面では経験者と未経験者間で違いは見られなかったものの、経験者は学習者の間違った項目を具体的に示していることや、学習者のレベルを多角的に判定して報告している等、内容面で未経験者とは異なる特徴があったことを明らかにしている。また、未経験者の多くが学習者の知らない単語項目を記録していたのを受け、経験者も記入するようになったとのことである。未経験者は形式の面で経験者の書き方を参考にしたと考えられる変化が多少見られたものの、定着はしなかったとも報告している。

ただし、趙・長谷川（2011）が調査対象としたのはティーチングアシスタントであり、対象期間は全12週である。プロの日本語講師を対象とし、かつ長期にわたる観察を経た場合には違う結果が得られる可能性があるだろう。

3. 研究目的

前述の先行研究を踏まえ、本研究では次の2点を明らかにすることを目的とする。

- (1) 高校生対象の教育現場での引継ぎ記録の書き方にどのような特徴があるのか。
- (2) 他の講師との引継ぎ経験を経て各講師の書き方がどのように変化するか。

この2点を明らかにし、導き出された結果に基づき、高校生を対象としたチームティーチングによる日本語教育現場における、より効率的・効果的な授業引継ぎ記録の

形式を提案することを目指す。

4. 研究方法

1つ目の研究の目的である「高校生対象の教育現場での引継ぎ記録の書き方にどういった特徴があるか」を明らかにするため、「授業報告」の紙面の使い方と、記述内容を分析してカテゴリー別に分類する。あわせて、講師が授業報告を記載する際に心がけていることや、授業報告に対する意識を知るために、講師たちにアンケートと聞き取り調査も実施し、授業報告の書式の改善のための資料とする。

また、1学期から3学期にかけて続けて見ていくことで、各講師が他の講師が書いた内容やスタイルの影響を受け、書き方が講師間で統一されていくのではないかと筆者らは予想をしていた。すなわち、時間の経過とともに書く必要のある事柄の共通理解が形成されて、本当に必要な情報だけが他の講師に見やすい形で記載されるように揃っていくのではないかと考えていた。もしそのような変化が起こるなら、それを引継ぎ記録の書式に反映させれば、必要なことが読みやすくまとめられた効率的な授業報告書式ができるのではないかと期待していた。そこで、2つ目の研究目的である、「他講師との引継ぎ経験を経て書き方がどのように変化するか」については、前述の「授業報告」の紙面の使い方と記述内容の結果を講師ごと、及び学期ごとにまとめ、1学期から3学期の変化を観察する。

次節からは、分析対象とした「授業報告」の記述内容の分析方法と、講師へのアンケートと聞き取り調査の内容について詳しく述べる。

4.1 「授業報告」記録の内容分析

分析対象は、4名の講師が書いた2020年度1学期から3学期の計602コマ分の授業報告の記述である。

分析方法としては、授業の進度表と照らし合わせて、実施項目を単に転記しているような部分を除き、全記述をメッセージ単位に分割した。まず、メッセージの内容によってラベル付けを行った。例えば、「Aさんが隣で一生懸命Bさんを助けていました。全体の流れはつかめたかと思います。」という記述については、前半が「授業中の様子」、後半が「生徒の理解状況」とラベルをつけ、分類した。その後、類似の内容を示すラベルをグループ化し、分類項目を整理した上で、再度全てのメッセージを分類し直した。それをまとめて、表1に示す通り、「教授方法」「生徒の情報」「生徒の学習状況」「教師の振り返り・今後の指導方針」「その他」の5つの上位カテゴリーに分類した。その上で、講師ごとに分類、集計することによって、各講師の書き方の特徴を把握するとともに、学期ごとの変化を観察した。

表 1 「カテゴリー分類」

上位カテゴリー	メッセージ単位に付与した【ラベル】と文例
教授方法	【授業内容】例) 範読や生徒の原文音読なども入れながら、内容理解、問の確認をしました。 【教え方の工夫】例) て形の歌を紹介しました。
生徒の情報	【個人情報】例) アルバイトをコンビニで週 4 日 6 - 10 時しているそうです。 【授業中の様子】例) それぞれに真面目に自分のやることに取り組んでいました。
生徒の学習状況	【生徒の理解状況】例) まだ日常会話程のスピードで多くの情報が入ってくるとついていくのは難しいようです。 【生徒の間違い】例) 「は」と「が」の間違いがありました。
教師の振り返り・今後の指導方針	【教師振り返り】例) 確認、練習はもっと応用をきかせた方がよかった。 【今後の指導方針】例) よく出来るので、意見を書かせるとき、もう一步、いつ、どこで、どのように、など考えさせたいです。
その他	【授業中のエピソード】例) 1 番に教室にきてけん玉に挑戦しました。 【他講師への感謝】例) ふせんをつけて返却用ファイルに入れておいていただき、ありがとうございました。

4.2 日本語講師へのアンケートと口頭・チャットでの聞き取り

2021年7月に、5名¹の講師にアンケート調査を実施した。授業報告のフォーマットや記述項目等について、次の5つの質問をした。

- (1) 授業内容や進捗状況以外で授業報告に書いている項目
- (2) 他講師の記載内容で有益だった情報
- (3) 授業報告を書く際に心がけていること
- (4) 進度が異なる複数名の生徒の授業報告を書く際の工夫
- (5) 他講師の授業報告の書き方・項目で真似したいと思った点

また、後日口頭またはチャットで、アンケート結果に基づいて、各講師に聞き取り調査も実施した。

これらの調査によって、講師自身の報告によるものではあるものの、講師の授業報告に対する意識を知ることができた。この結果は質的データとして、授業報告の内容分析の結果と照らし合わせて、さらなる授業報告書の改善のための参考資料とした。

5. A 高校における日本語講師間の情報共有

本研究が分析の対象とする授業引継ぎ記録は、A高校の日本語授業を担当する講師間で交わされたものである。本章では、その日本語授業の概要を述べた上で、引継ぎがどのように行われていたかをその書式とともに示す。

5.1 2020年度の日本語授業の概要

A高校での日本語指導は、4名の非常勤講師がチームティーチングで担当した。コース全体では週25コマの授業があり、各講師は週3～9コマの授業を担当した。なお、授業は全て対面で実施した。

4名の講師は日本国内の日本語学校、中等教育機関、海外の教育機関等にて日本語教師の経験があり、その内2名は児童生徒を対象とした教育経験も10年以上ある。

生徒は一人週5コマの授業を受けるが、受講パターンは様々である。週2日で5コマを受講する生徒もいれば、大体毎日1コマずつ授業がある生徒もいる。ほぼ個別指導型授業の生徒もいれば、常に複数名のクラスメートと学習する生徒もいる。講師側も4名全員が全生徒の授業を担当するわけではなく、講師によって担当する生徒数も異なる。

どのクラスも、毎回生徒のメンバーが異なり、レベル、進度もさまざまで、クラス運営、学習状況等の把握が非常に複雑な状況である。このような授業形態であるため、講師間で確実に授業引継ぎを行う必要があった。

5.2 授業引継ぎの方法

A高校においては、授業後、講師は授業報告書を完成させ、翌日の講師のみならず、全講師間で引継ぎ記録を共有した。同時に、講師控室には紙媒体の授業報告原本を綴じて保管する授業報告ファイルを置き、講師がいつでも手に取って閲覧できるようにした。2章に挙げた先行研究で用いられているWeb上に書き込む形式のシステムは、高校の情報セキュリティ上の事情で導入することはできなかった。

5.3 「授業報告」の書式

講師が使用したのは「授業報告」という書式(図1)である。図1の①～④は、①生徒の所属クラスとイニシャル、②進度表の通しNo.、③進度の遅れ・変更があるかどうか、④出欠等、次回の授業担当者に引継ぐべき必須事項を簡潔に伝えるために設けた欄である。②の「進度表 通し No.」とは、進度表に記載された番号を記載するための欄である。生徒ごとに進度が異なるため、進度表に通し番号をつけて管理し、この番号により進度表と照合し、その日の指導項目を確認できるようにしていた。その他、課した宿題や提出された宿題について記載する欄と、最下段には月末の授業担当者が生徒へポートフォリオの記入指示を実施したかチェックする欄を設けている。

書式の下半分には、「授業内容・引継ぎ事項」(図1⑤)と「所感・コメント等」(図1⑥)の欄がある。クラスの進捗状況や理解状況等の引継ぎ必須の情報がこの2つの欄に簡潔に記載されることを想定している。レベルや進度が異なる複数名の生徒が在籍するクラスもあり、報告の仕方が複雑になる恐れがあったため、内容や授業の様子、連絡事

項等を敢えて細かく分けず、大きく2つに区切ることで自由度を高めることとした。実際に、この部分は紙面の使い方は特に決めていないため、書き方や注目点は様々である。この2つの欄に各講師が授業報告の書き方をどう工夫しているか、何を同僚間で共有すべき重要事項と考えているかが表れていると考えられる。そこで、本研究では、「授業内容・引継ぎ事項」と「所感・コメント等」の二つの記載欄に特に注目して分析を行う。

科目名		授業報告		
月 日 ()		時間目	教室: ④	
			授業担当者: ④	
クラス	生徒名 ※イニシャル表記	進度表 通し No.	③ 進度	④ 出席・欠席・遅刻
①	②		<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
⑤ 授業内容・引継ぎ事項 ※導入・練習方法(簡単に)、指導の流れ、追加した練習や活動、工夫等				宿題
⑥ 所感・コメント等 ※生徒の様子、困難点、得意な点など気付いたことがあれば記入をお願いします。				
月末の授業担当者 To Do				
<input type="checkbox"/> ポートフォリオの「今月の振り返り」の記入指示				
<input type="checkbox"/> ポートフォリオの「来月の目標」の記入指示				

図1 「授業報告」書式

6. 分析結果と考察

6.1 引継ぎ記録の〈紙面の使い方〉の特徴

まず、授業報告書の紙面のレイアウトについて、講師によって授業報告書1枚当たりの報告生徒数に違いがあった。例えば、レベルや進度、またはその両方が異なる生徒2名に対して一斉授業を行う場合の書き方は2パターン見られた。一つは生徒Aと生徒Bの報告を1枚に1名ずつ書いて報告する「1名单独報告型」で、もう一つは、生徒Aと

生徒 B の報告を 1 枚にまとめて書く「複数名一斉報告型」である。生徒が 3 名以上の場合は、「1 名単独報告型」は授業報告書が生徒の人数分あり、「複数名一斉報告型」は人数に関わらず 1 枚のみということである。「1 名単独報告型」は生徒一人一人について詳細な情報を伝えられるというメリットがある。一方、「複数名一斉報告型」は、レベルや進度が異なる複数名一斉授業という複雑なクラスの場合に、どのような手順や時間配分で授業を展開しているかという工夫を他講師に共有できるメリットがある。

6.2 引継ぎ記録の〈記述内容〉の特徴

講師アンケートによれば、全ての講師が授業内容や進捗状況以外に、生徒の習熟状況や授業態度、クラスの雰囲気、生徒の個人に関する情報や高校生活に関する情報等についても授業報告書に書いていると回答していた。

丸山 (2005:49) は引き継ぐべき項目の一つとして「進捗・定着状況」を挙げているが、本研究では「進捗」はどの講師もほぼ毎回記録していたものの、一部の講師からは積み残し項目がわかりにくいという意見も出た。「定着状況」は明確に書かれていない場合もあった。また、河野・小河原 (2006:232) では、「自分はどのように考えて文型を導入したのか、このように導入したから恐らく学習者はこのように考えているはずだ、学習者からこんな質問が出た、だからこのように回答した」といった、生徒の様子だけでなく、講師自身の考えや振り返りも引継ぐべきだと主張しているが、「教師の振り返り」については時折書かれている程度であり、講師によってその比率も異なっていた。さらに、趙・長谷川 (2011) で報告されているように、語彙や文型、漢字について「間違いを具体的に示す」記載や、田中 (2018) で触れていた「体調や態度」に関する記載は本研究の引継ぎ記録においても散見された。また、吉田 (2021) が 9 つのカテゴリーを抽出したことは 2 章で述べた通りだが、その内、授業形態の違いから「⑤オンライン授業、接続に関する課題」の記載はないものの、それ以外のカテゴリーは本研究においても全て確認できた。

ただし、授業報告の内容分析の結果、講師によって 5 つの上位カテゴリーの記述の割合に違いが見られた。図 2 は、2020 年度に作成された授業報告の全記述における上位カテゴリーの割合を、講師別に示したものである。講師 4 名の記述の割合は教授方法の割合が一様に高い。特に講師 C、D は 7～8 割の記述が教授方法に関する内容であった。講師 C、D は授業の引継ぎにおいて教授方法の伝達を重視している「教授方法重視型」だと言えるだろう。一方、講師 A、B の教授方法に関する記述は全体の 5 割程度だが、生徒の情報に関する記述が 3 割程度見られた。講師 A、B は C、D に比べ、生徒の情報の伝達をより重視する傾向がある、「生徒情報重視型」だと考えられる。

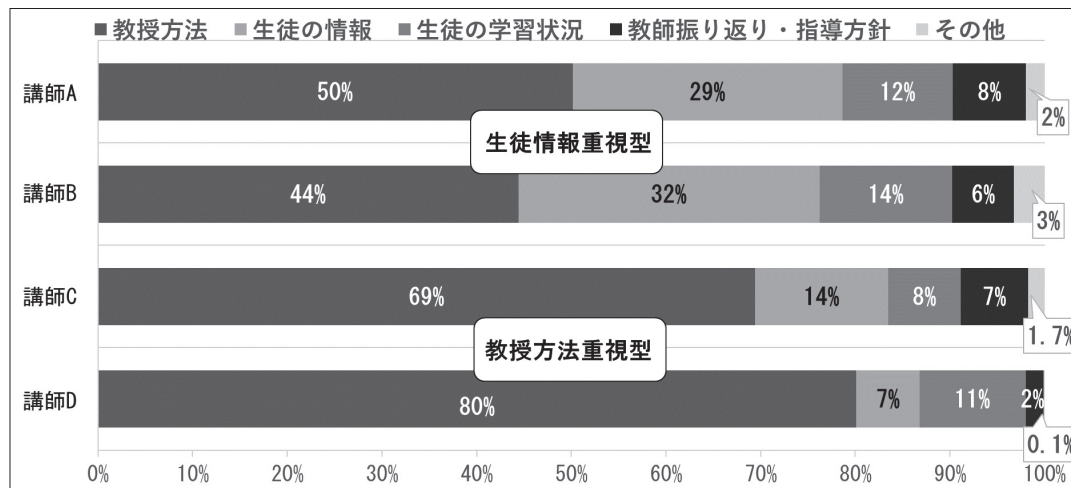


図2 5つの上位カテゴリーの記述の割合（講師別）

なお、全ての講師に確認したところ、授業報告書は教案を兼ねて授業前に作成しており、授業中に机の上に置いて確認する等して使用していた。その上で、授業中や授業後に気づいた点を書き込んで、授業報告書を完成させる方法を全員が採っていた。

そのような使用状況下で講師 C、D が教授方法の記述量が多い「教授方法重視型」に分類されたのは、授業の時間配分を示したり、導入方法や例文、練習方法を書いたりする等、図3のように指導の手順を細かく記載する細案形式の書き方をしていた影響が大きい。一方、「生徒情報重視型」の講師は、授業内容に関しては図4のように、予定表に記載されている学習項目のみ書いている場合が多かった。つまり、「教授方法重視型」の授業報告は、どのような授業を展開したのかや、授業の工夫を他の講師に詳しく共有することもできるやり方だと言えるだろう。

14:30
『語学留学生の～Ⅰ』
① LI3BP82ナイ形の復習😊
P82口頭確認+禁止カード？！《～ないてください》
② II Nなければなりません／いけませんP83
導入：「学校は制服がありますね。好きな服を着てもいいですか。」ダメです。⇒制服を着なければなりません。
《ナイ形ない + ければなりません》

14:40✍️
p83 別紙に書く ※半分にかける。あとで答え（いいえ、～なくてもいいです など）を書かせるため

図3 「教授方法重視型」の講師による授業内容の記載例

L11 B2文型練習 〔て形〕復習 II Vましょうか はいVてください III Vて、Vて、Vます IV VてからVます

図4 「生徒情報重視型」の講師による授業内容の記載例

6.3 「教授方法重視型」と「生徒情報重視型」の講師の授業報告に対する意識の違いと共通点

続いて、「教授方法重視型」と「生徒情報重視型」の講師へのアンケートと聞き取り調査の結果から、対照的な点を抽出した。

まず、「授業報告を書く際に心がけていることは何か？」という質問に対して、「教授方法重視型」の講師Cは、誤解していた言葉や理解していなかった言葉等、コミュニケーションで支障が起こりそうな点を記録することを挙げた。つまり、講師Cは言葉の誤解や理解していない点を重視しており、日本語習得における問題を講師全体で把握することが重要だと考えていることがわかる。一方、「生徒情報重視型」の講師Aは、生徒のクラスでの様子等、生徒について講師全体で共有した方が良いと思う内容を記録することを挙げた。講師全体で共有したほうが良いこととは、具体的には欠席や体調不良の要因、教科学習に対する不安や要望を指すと答えた。講師Aは生徒の高校生活に寄り添い見守ることを重要視していることがわかる。

また、全ての講師が、他の講師が引継ぎ記録に書いた生徒情報が役に立つと答えていたため、その情報を授業にどう役立てたのか、追加で質問した。教授方法重視型の講師Dは「生徒の授業態度や生徒の高校生活に関する情報は、授業で具体例を挙げる際に役立てている」と答え、同じく教授方法重視型の講師Cは、「自分の授業での学習態度や習得の様子に心配な点があったとき利用した」と回答した。このことから、教授方法重視型の講師は自分自身の教授に必要な生徒情報を他講師の授業報告から得て、参照しようとしていることがわかる。さらに、講師Cは「友達同士の摩擦になりそうな点は注意を促す」とも答えた。生徒情報を日本語の習得のために役立てるだけでなく、生徒同士の人間関係にも配慮する等、子どもを導く高校教員であることを意識していることがうかがえる。一方、生徒情報重視型の講師Aは、「個人的な情報でも、生徒との雑談に生かすことができる」と回答した。同じく生徒情報重視型の講師Bは、「生徒の習熟状況や生徒の授業態度の情報を自分の授業で話題作りに使っている。」と答えている。生徒情報重

視型の講師 A、B は、教授内容というよりは雑談や話題作りといった生徒との関係構築のために、生徒情報を役立てていると考えられる。さらに講師 A は「生徒の良い点の記載から自分もそのような視点から生徒を見たい」と回答していることから、生徒と対峙する際の新たな視点を得ようとする姿勢も見られる。すなわち、生徒情報重視型の講師は、生徒とのよりよい人間関係構築を重要視しており、日本語支援の枠を超えて、生徒のサポーターのような立ち位置を目指していると言えるだろう。生徒情報重視型の講師が常に生徒情報に注意を向けている要因として、講師 A と B が児童生徒に対する日本語教育または中等教育機関での教育経験が豊富であるため、未成年の子供の見守りを重要視するという指導観が影響している可能性があるのではないだろうか。

以上のように、「教授方法重視型」「生徒情報重視型」の 2 タイプに分類されるものの、どちらのタイプの講師も「生徒情報」を重要視しており、授業報告に書くべき項目だと感じていることが浮き彫りになった。同時に、「教授方法重視型」の講師が言及していた通り、日本語習得における問題の把握、つまり生徒の理解状況は日本語を指導するにあたって必須であり、チームティーチングによる指導においてはその情報を明確に記録して共有することが欠かせないと考えられる。

6.4 引継ぎ記録の変化

変化を観察したのは、各講師の引継ぎ記録の書き方と内容分析の結果から見える特徴の 2 点である。

まず、各講師の引継ぎ記録の書き方について、1 枚当たりの報告生徒数、記述の割合の一覧を示したのが次の表 2 である。この 2 点に関して、1 学期から 3 学期を通してどの講師にも変化は見られず、各自のスタイルは学年を通して維持された。

表 2 各講師の引継ぎ記録の書き方一覧

	講師 A	講師 B	講師 C	講師 D
(1) 1 枚あたりの報告生徒数	複数名 一斉報告型	1 名单独 報告型	複数名 一斉報告型	1 名单独 報告型
(2) 記述の割合	生徒情報 重視型	生徒情報 重視型	教授方法 重視型	教授方法 重視型

次に、前述のカテゴリー分類を用いた内容分析の 1 学期から 3 学期の変化を示したものが図 5 のグラフである。分類したカテゴリーの割合を学期ごとに算出し、講師別に示したものである。講師ごとにそれぞれのカテゴリーの増減は多少あるものの、全員に大きな変化は見られなかった。

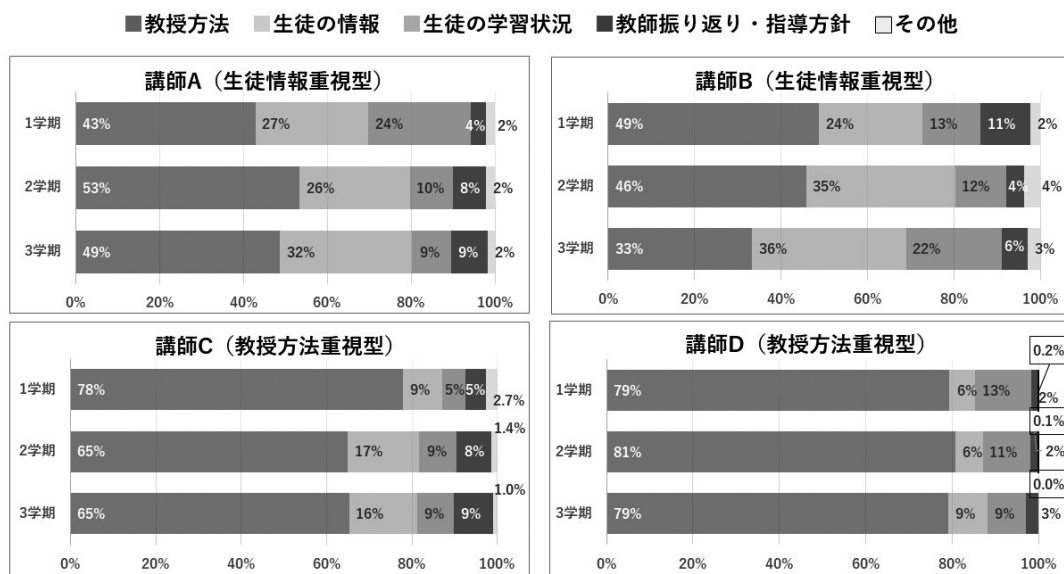


図5 上位カテゴリーの記述の割合 1～3学期の変化（講師別）

もともと、アンケートの回答内容を見ると、他講師が記載した「講師の授業の工夫（練習方法、説明方法、進め方、教具の使用、等）」が有益だったと全員が言及している。また、5名中4名の講師が他講師の授業報告の書き方や項目で真似したいと思った点を挙げていた。具体的には、生徒の様子や他教科の話、授業の工夫、複数人指導の際の授業報告の書き方についてである。

しかし、自身の授業と関係がある直前の授業報告以外を見ているかという質問に対して、教授方法重視型の講師C、Dは必要な授業報告以外は基本的には読んでいないことがわかった。このタイプの講師はあくまで自分の授業に軸足を置いて授業報告に向き合っているため、他講師の授業報告の書き方や項目を真似るに至るほど、他講師から大きな影響を受けていないと考えられる。しかも、講師Cは、他の講師の授業も参考にしたいが、授業の進め方や詳しい内容が書かれていないので残念だともコメントしている。一貫して教授方法重視型で細案方式の書き方であった講師Cは、授業の具体的な展開方法が詳しく書かれていない生徒情報重視型の授業報告は教授方法が共有されないため、その点の改善を望んでいたことがわかった。

それに対して、生徒情報重視型の講師A、Bは自分の授業と直接関係する授業報告以外もよく見ていたと回答している。ただし、6.3で述べた通り、授業報告で得られた生徒情報を重要視し、その情報を活用して生徒との関係構築へ繋げようとしている傾向が強いため、教授方法重視型へ転換することはなかったのだろう。また、外国人生徒を受

け入れた高校の教師6名にインタビューを行った大東(2021)は、生徒のテストの結果の変動等に比べ、生徒が元気そうにしているか、クラスになじんでいるか、遅刻や欠席が続いていないか等、教師は生徒の日々の様子により多く関心を向けていたことを明らかにしている。生徒情報重視型の講師A、Bも、教授方法以上に生徒の様子を気にかけて見守ろうとしていることから、生徒の様子に強い関心が寄せられており、それは変化することはなかったであろう。

したがって、他講師との引継ぎ経験を経て、ほとんどの講師が他講師から多少なりとも影響を受けていたと示唆されるものの、書き方や記載内容が大幅に変化し、授業報告のスタイルが収斂されるには至らなかったと言えるだろう。

7. 新たな「授業報告」書式の提案

上記の分析・考察、そして講師からの要望も踏まえ、次の3つの項目を記載する欄を追加した書式(図6)への改訂を提案する。

まず、「生徒の理解状況」の記入欄(図6①)を追加する。6.3で述べたように、教授内容重視型の講師が重要視していた日本語習得における問題を把握すること、そして共有を促すねらいがある。また、より具体的な記載を期待する。生徒情報重視型の講師は、前述の通りこの点にはあまり注意が向いていないが、専用の欄があればそれについて一考するきっかけとなる。特に、各生徒が苦手とする内容を書き留めることで、他講師のみならず授業報告を書いた講師自身が指導の際に意識するようになり、より効率的に日本語指導ができるのではないだろうか。

次に、「生徒の情報」の記入欄(図6②)である。ここには、日本語学習外の指導・説論、他教科での様子等を記載する。これも、6.3で明らかにした通り、教授方法重視型、生徒情報重視型双方の講師が役に立つと考えていた情報である。また、外国人高校生支援特有の必須共有事項であると考えられる。専用の欄を設けることで、講師間の情報共有が確実に行われ、生徒の高校生活や人生の「見守り」へ繋がることを期待したい。それに加え、この欄で得た生徒の情報を授業に活用すれば、生徒一人一人に合った話題や文型導入が行えるため、学習項目の定着に繋がりやすいというメリットも挙げられる。

最後に、出席チェック欄のすぐ下(図6③)に変更のあった授業内容を書く。6.2で示したように、これまでの授業報告では、積み残し項目がわかりにくいという声があったためである。進捗状況の報告はチームティーチングにおける授業報告の基本であるが、専用欄がなければ抜け落ちる危険性もあり、報告したつもりでも他講師にはわかりにくい場合もある。限られた授業時間を有効に使用するため、進捗状況は他講師へ伝達すべき必須項目である。確実な情報伝達を目指し、最上部に専用の欄を設けることとする。

これら3つの項目を加えた上で、授業内容の引継ぎ欄は最下段に配置するものの、そのまま残す。6.2で言及したように、講師が細案として授業前に記入して授業中に使用することもできる上、各講師が3項目に該当する内容以外で重要だと思うことや伝えたいメッセージを書く等、自由に使えるようにするためである。

科目名		授業報告		
月 日 ()		時間目	教室:	
			授業担当者:	
クラス	生徒名 ※イニシャル表記	進度表 通し No.	進度	出席・欠席・遅刻
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)
			<input type="checkbox"/> スケジュール通り <input type="checkbox"/> 遅れ・変更あり	出・欠・遅(分)

③ 変更のあった授業内容(やり残しや積み残し項目、追加で実施した項目)

① 生徒の理解状況(理解していたこと、理解していなかったこと)

② 生徒の情報(日本語学習外の指導、他教科での様子等)

授業内容・引継ぎ事項	宿題
------------	----

月末担当者は「目標シート」の振り返りと来月の目標記入指示をお願いします。

図6 改訂版「授業報告」書式

8. おわりに

本稿では、高校での日本語指導現場における日本語講師間の授業引継ぎ記録を分析した。紙面の使い方の分析と引継ぎ内容の分析を行うことで、授業引継ぎ記録の特徴と各講師の書き方の変化を明らかにするとともに、講師へのアンケート結果を踏まえて新たな授業報告の書式を提案した。

まず、授業引継ぎ記録の特徴の一つ目として、授業報告書の紙面のレイアウトは「1名单独報告型」と「複数名一斉報告型」に分類されることを示した。

次に、特徴の二つ目として、引継ぎ内容を分析した結果、「教授内容重視型」と「生徒情報重視型」に分かれることを提示した。また、「生徒情報重視型」の講師のみならず、「教授内容重視型」の講師も生徒情報を役に立つと考えており、未成年である高校生対象の日本語教育現場における授業報告では、生徒情報の共有を重視する点が特徴的だと言えるだろう。生徒情報を活用することで、より各生徒に合った話題や例文が提示できる等の効果が期待できることから、授業報告の書式にも「生徒情報」の欄を専用にするべきだと判断した。

同時に、「教授内容重視型」の講師が言及していた生徒の理解状況についても、チームティーチングによる日本語指導を実施する以上、講師間で情報共有が欠かせない項目である。そのため、「生徒情報重視型」の講師にもその点を意識してもらおう仕掛けが必要である。

さらに、講師の授業報告に対する意識を知るために実施したアンケートによると、他講師から何らかの影響を受けた可能性があるが、各講師の授業報告の書き方やスタイルは、時間を経ても大きな変化が見られなかったことも明らかになった。また、各講師が独自のスタイルを貫いていることも関係してか、これまでの授業報告では、積み残し項目がわかりにくいという意見も挙げられた。

以上の結果に基づき、高校生を対象とした日本語教育現場における、より効率的・効果的な授業引継ぎ記録の形式として、「生徒の理解状況」、「生徒の情報」、「変更のあった授業内容」の3項目について専用の欄を設けることを提案した。同時に、講師各自のスタイルを尊重し、自由度を持たせるために、「授業内容・引継ぎ事項」欄はそのまま残すこととした。

なお、本稿においては、引継ぎ記録の内容を5つの上位カテゴリーに分類することで大まかな特徴を示した。5つのカテゴリーの中に含まれる「教師の振り返り・指導方針」をはじめ、記録内容の詳細については今回扱っていない。今後は、テキストマイニング等の手法を用いて、各カテゴリーの中で講師が共有しようとする中身についてより詳しく観察することで、授業報告の効率化のみならず、授業改善へどう役立てるかという視点でも分析を行っていきたい。また、高校における日本語指導は、高校教員等の他業種

との連携が欠かせない。今後は、日本語教育を専門としない関係者にとっても有用な授業引継ぎ記録の形式を検討していく必要があるだろう。

注

1. アンケートを実施した2021年度は、2020年度の授業を担当した4名を含む5名の非常勤講師が授業を担当している。引き続き2020年度と同じ授業報告の書式を使用しているため、新たに加わった1名を含む全5名の講師にアンケートに回答してもらった。

参考文献

- 上原美穂 (2018) 「外国籍生徒の学校適応と進路選択—日系人青年の語りから」『質的心理学研究』17:87-104
- 河野俊之・小河原義朗 (2006) 『日本語教師のための「授業力」を磨く30のテーマ。』アルク：232
- 北村よう (2018) 「FileMaker Go を使った授業連絡の効率化」『日本語教育方法研究会誌』24(2)：158-159
- 大東直樹 (2021) 「外国人生徒の受け入れに対する高校教師の意味づけ—特別枠校を事例に—」『国際協力論集』28(2)：137-154
- 田中信之 (2018) 「初級文法クラスにおける授業引継ぎ—授業記録の分析を通して—」『富山大学国際機構紀要』創刊号：1-11
- 趙恩英・長谷川守寿 (2010) 「TA 参加型日本語クラスにおける Moodle を用いた授業連絡について」『日本語教育方法研究会誌』17(1)：48-49
- 趙恩英・長谷川守寿 (2011) 「教育経験の異なるティーチングアシスタントによる Moodle 上での授業報告—形式・内容の違いとその変化について—」『日本語教育方法研究会誌』18(1)：10-11
- 丸山敬介 (2005) 『教師とコーディネーターのための日本語プログラム運営の手引き』スリーエーネットワーク：49
- 矢元貴美 (2018) 「フィリピンにルーツを持つ子どもたちの困難—日本の学校で学ぶ子どもたちに焦点を当てて—」『多民族社会における宗教と文化：共同研究』21：3-15
- 吉田美登利 (2021) 「効果的なチームティーチングに向けた授業引継ぎ記録の分析」『第23回専門日本語教育学会研究討論会誌』：10-11
- 脇田里子・越智洋司 (2006) 「授業報告としての Moodle の活用」『日本語教育方法研究会誌』13(1)：12-13